平成１４年１２月１日発行

かまだし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第6号

わがまちの顔

画家　故熊川　昭典さん

故熊川昭典氏

「絵描きは絶えず描いて、描き続けて何かが出てくる。自分の絵がなかなか構想と一致せず、たまに自己陶酔する絵ができてくるから続けられるんです。試行錯誤は辛いけど、そこでポッと出てくる絵が階段で言えば一歩上がる感じですね・・。具象を始めて十四、五年になりますが、全然絵にならなかった。この数年です。どうやら絵らしくなったのは・・・」（画想の空間熊川昭典『美術世界』第３５号１９９２年９月）

海とヨットハーバーの画家として知られる熊川昭典氏は、晩年の円熟期を迎えて、自身をこのように回想しています。

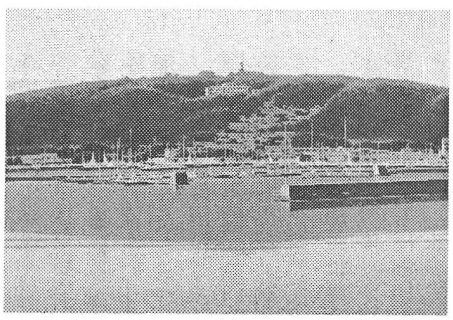
１９３０年、熊川昭典氏は長崎に生まれ、６歳の時に母親が亡くなり、やがて母の故郷であった唐津へと移り住みました。姉の勧めで訪れた近所のアトリエで初めて油絵を知った熊川少年は、以後その魅力にとりつかれ、ミレーの『落穂拾い』や『晩鐘』に感動。模写をするかたわら、自らも故郷の美しい自然に影響を受け、１０年に及ぶ唐津での多感な時期を送った後、画家への道を目指して上京、本格的に絵の勉強を開始しました。

１９５０年、２０歳の時に第一美術展に初入選を果たし、以後数年間にわたって同展に入選を続け、画家としてスタートを切りました。この間１９６７年には、自らの絵画の方向性を見つめ直すために欧米留学。その後は１９８０年代を中心に、５回にわたって南仏、スペイン、イタリアへの取材旅行が続き、『熊川様式』の展開と完成に向かうと同時に、故郷の唐津への想い、特に海に対する強い憧れも作品の随所に感じることができます。

１９７１年、大田区東矢口に転入。１９８７年、大田区民プラザで行なわれた第１回大田区在住画家美術展に出品。以後第１４回まで同展に連続出品されました。

２０００年、同展への『江ノ島遠望』（未完、絶筆）の出品を最後に、２０００年１月、胃がんにより逝去。享年６９歳でした。

１９９９年には、区民ホールアプリコで行なわれた新大田区百景展に、区の要請を受け『万福寺』が製作出品されました。なお、現在は大田区産業プラザ４階のコンベンションホールに、氏の作品『島影』が展示されています。



島影（１９９８年）

凧揚げ・子供の頃の夢思い出してみませんか

作品を前に、ハッピ姿の須賀さん

♪ たこたこあがれ
　風よくうけて
　雲まであがれ
　天まであがれ
♪ 絵凧に字凧
　どちらも負けず
　雲まであがれ
　天まであがれ
♪ あれあれ下がる
　引け引けつなを
　あれあれあがる
　はなすなつなを

少年の「空への憧れ」を簡単に実現させてくれたもの《凧》。町の小さな駄菓子屋さんにも必ず置いてありました。「人気アニメ凧」や昔ながらの「やっこ凧」や「武者絵凧」。どれも鮮やかに彩色され、揚がった姿を思い浮かべては、あれやこれや迷ったものでした。

握り締めた小銭を払い、一枚の凧を買って帰ると、新聞紙で尻尾を付けて、近くの空き地へ胸弾ませて走っていきます。風は強からず、弱からず、コンディションは良好。はやる気持ちを抑えられないのか、「糸目」が決まらない。凧はくるくる回るばかりで揚がらない。気を取り直して再び糸目を調整する。静かに凧を風の中に送り出す。「行けるぞ！」手元を離れて、少しずつ高度を上げていく。やがて、仲間の凧と同じくらいに揚がると、逆光に鮮やかな色が浮かび上がる。凧はどんどん空に吸い上げられていく。目をそらすと見失ってしまいそうに小さくなっている。その頃にはもう凧揚げをしていると言うより、天空を一本の糸で操っているような気持ちにさえしてくれる。

その凧が自分で作った凧であればなおさらである。

「〈DIGI KITE GALLERY〉URL http://www.tcp-ip.or.jp/~taco/〉より引用。」

さて今回の特集は凧の魅力の虜になった蒲田西地区在住の方々三人に登場していただき、それぞれの凧への想いを披露していただきました。

須賀照夫氏　多摩川二丁目在住　日本の凧の会会員

「鳥のように大空を自由に飛びたい。」、誰でも少年の頃に夢見るロマンがあったはず。その夢を凧に託し、身も心も凧と共に空に舞い上がるような感動を体験して欲しい。もちろん、日本の伝統・文化を後世に伝え残すことを目指し、二十数年に渡り凧に情熱を傾けている人がいます。「日本の凧の会」の世話人でもある凧師、須賀照夫さんです。

須賀さんは品川区役所に籍を置く地方公務員である傍ら、休日の殆どは凧との付き合いに費やしています。さらに、諸外国からの招待や派遣の依頼、全国各地の小・中学校や公共施設での凧揚げ、凧作り教室と展示会、絵柄になる武者絵や浮世絵まで、本職顔負けの筆使い、色使いで実演と指導を行なってきました。

訪問した外国はアメリカ、中国を始め数カ国、国内は二十数都道府県にも及ぶ《凧》行脚にくれる忙しさです。

「高度経済成長は効率化を追求し、消費が美徳とされたため、最近の子供たちは創作の楽しみを知らない。」と須賀さんは憂えています。

そのため今、次世代を担う小中学生を対象に凧の歴史や文化、凧作りの基本である素材の選定から「糸目」、「そり」、「しっぽ」の役目と技術的な細部までを教え、継承者の育成に取り組んでいます。平成十二年に初の個展を開き、昨年は第一回の個展を超える見学者に自分自身驚いたとのこと。さらに今年は第三回を迎え、今二百点の作品から出品を選ばなければならず、頭が痛い毎日だそうです。

「日本の国はもちろん、世界の空に日本凧が舞い上がり平和のシンボルとして多くの人々に愛されるように・・・」と目をキラキラと輝かせて抱負を語る姿はまるで少年のようでした。

（取材　滝口委員）

馬場泰民氏　西蒲田三丁目在住　日本の凧の会会員

西蒲田三丁目のたけのこ公園から池上線に向かって歩いていくと左手に凧の工房がある。

主の馬場泰民さん（七十五歳）は、「青空のもとで自分の作った凧を揚げることは最高の喜び。」と語る。そのためには、少しくらい面倒でも、絵は気長に満足いくように描いている。工房の壁に掛けてある大小様々な凧は、丹念で鮮やかな色使いである。凧作りは生まれ故郷、会津若松の少年時代にさかのぼる。姉が買い与えてくれた雑誌「少年倶楽部」に凧作りの図面が載っていた。番傘の骨を使って作った思い出が印象に残っている。工業高校の窯業科を卒業後、就職のため横浜市の杉田に住み、結婚を機に西蒲田へ移った。二度目の凧作りは子供が物心ついた頃、少年時代を思い出し、隣の公園で馬場さん手作りの凧を揚げ子供と遊んだ。

七尺の大凧、右手前が馬場さん

昭和五十年頃、以前横浜に住んでいた関係で神奈川新聞を取っていた馬場さんは、そこに辻堂海岸で行なわれる凧揚げ大会の記事を見た。誘われるように会場にまで足を運び、あらためて凧の魅力を再認識。本格的な凧作りに挑戦する決心をした。

「日本の凧の会」の本部が日本橋にあり、凧の博物館も併設されている。世界各地の凧が飾ってあり、通ううちに一層強く惹かれ、ますます惚れ込んでいった。その後「日本の凧の会」横浜支部に入会。毎月の例会の午後にはそれぞれ自作の凧を持ち込み、アメリカ軍の瀬谷通信隊広場で凧揚げに興じている。

馬場さんは、お孫さんと同世代の小学生にも凧作りを指導している。後日、小学生からお礼の手紙が来ることもある。「これがとても嬉しいんだよ。」と満面笑みを浮かべ語る顔は少年時代の面影を見た気がする。

凧揚げには体力が必須である。毎朝一時間のウォーキングを欠かさない馬場さんであるが、今少し気になっていることがある。息子さんから車の運転をそろそろ止めるように言われていることである。「車に乗らないと大きい凧を持って遠くには行けないよね。でも何とか凧を揚げられないことはないけど。」

馬場さんなら、何歳になってもきっとどこかで凧を揚げているに違いないと思いました。

（取材　六車、瀬川委員）

長田　博氏　西蒲田四丁目在住　六郷とんび凧の会会員

長田さんは昭和五年生まれの七十二歳。

凧との出会いは、平成十二年十月、六郷文化センターで行なわれた凧作りの講座に娘さんが興味を持ち、参加申し込みをしましたが、当日都合が悪くなり、娘さんの代わりにお父さんが講座を受ける羽目になりました。講座では、「大とんび凧」、「小とんび凧」二個を実習と復習を兼ねて作ったそうです。

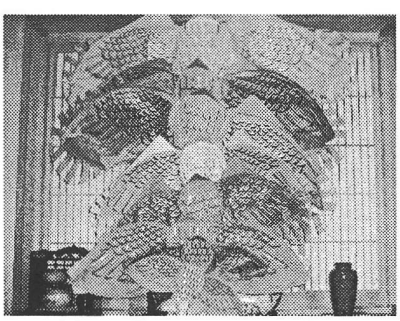
翌平成十三年正月、多摩川河川敷にて、いよいよその自作の凧を実際に揚げることになりました。そして見事に多摩川の風を受け、冬の青空に高く舞い上がっていったその時の感激がいまだに忘れることができないとおっしゃっています。

その後、「六郷とんび凧の会」の案内を受けて入会。諸先輩の指導を受け、大田区の民芸品である六郷とんび凧の伝承と、ふるさと大田区のPRや、社会教育の一助になっていければと思っているとのこと・・（これは建前で、本当は凧作り、凧揚げの魅力にとりつかれ、とにかく楽しくてやめられないそうです。）

今までに作った凧は講座の時のものも含め三十六個ほどになるそうです。

作る時の楽しみは、まさに「寝食を忘れて没入」の言葉通りで、凧作りが始まると、和室の一部屋は足の踏み場もないくらいに材料と道具が散乱し、娘婿はこの部屋を工房と、奥様は凧部屋と呼ぶとか。凧キチ扱いをされているそうですが、長田さんは凧キチ呼ばわりされる事に誇りと満足感を覚えているそうです。

（取材　宮下、石渡委員）



六郷のとんび凧、長田さん宅にて

今昔　町の移り変わり
西蒲田六丁目自治会長

平林　皓

西蒲田六丁目付近は、戦争中殆ど焼けてしまいました。しかし、昭和２３年、蓮沼三丁目栄交会として自治会が発足致しました。昭和２６年４月、焼失していた熊野神社を再建。戦後最も盛大な祭典を挙行しました。

昭和２８年６月には、池上防犯青少年野球大会に参加。当自治会のチームが優勝し、町は大変明るい雰囲気に包まれました。

昭和３３年には、蓮沼三丁目栄交会を蓮沼三丁目町会と改称。昭和３６年５月には、現在の西蒲田六丁目２６番に子供の広場を開設。町はますます喜びに包まれました。

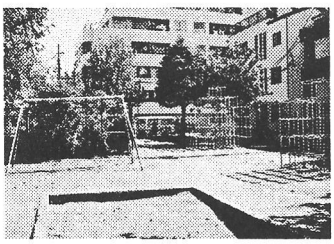
昭和４２年には住居表示の変更により、自治会の名を西蒲田六丁目自治会と改め、今日に至っております。戦後の焼け跡から明るい町作りに貢献して下さった先輩の会長、役員の皆様ありがとうございました。

現在の西蒲田六丁目は、家並みも揃い、大きなマンションもできて、住みよい町に発展しておりますが、空き巣、ひったくり等の事件が多く困っております。そこで、町内では、防犯、交通、防火、防災などの訓練に励み、役員始め住民の方々ともども事故のない明るく住みよい町づくりにがんばっております。

なお、日頃のごみ収集につきましては、決められた日時に出して頂きますよう、この場を借りてお願い申し上げます。

さて、昭和３６年にできました子供の広場が、この度大田区の公園に生まれ変わります。近隣の皆様方と大田区道路公園課を交えて、より良い公園にしたいと話し合い決まりました。

１１月から工事が始まりしばらくはご不便をお掛けしますが、来年３月には完成予定です。近代的な公園に生まれ変わる予定ですので、どうぞ楽しみにお待ち下さい。



生まれ変わる子供の広場

事務局からのお知らせ

この度、編集委員の交代がありました。ご紹介します。

退任した編集委員
（順不同、敬称略）
望月　治次、大澤　麻純
大村　弘、　小山　稚子
高橋　俊江　福士　靖史
西川　美津代

新任の編集委員
六車　泰子、下山　恵美子
鈴木　志郎

今年も、長引く不景気など厳しい一年でしたが、日本人のノーベル賞ダブル受賞等の快挙もありました。来年は皆様にとりまして良い年でありますように。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	２９，６７７人
	女	２７，３１１人
	計	５６，９８８人
世帯		２８，８３８世帯

平成１４年１１月１日現在

編集後記

わがまちの顔に登場いただきました画家、熊川昭典さんは、三年前に故人となられました。

本来であれば、大田区在住画家のリーダー的存在として活躍を期待されていただけに、本人の残念さはもちろんのこと、画家仲間や友人達も早すぎた死を悼む声が多く、あらためて熊川昭典さんの存在がクローズアップされることとなりました。

取材には、奥様の靖恵様にお忙しいなかご協力いただき、ありがとうございました。

特集《凧》につきましては、当蒲田西地区には、まだまだ大勢の方が凧に興味をもたれ、凧作りに、凧揚げに、第一線で活躍されている方が居られると思います。今回は三人の方の取材となりましたが、機会がありましたら、是非他の凧名人のお話も伺いたいと思います。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。
事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
三七三二―四七八五